

科学と人生

石原 純

我が国で今日に於ける程日本精神なるものが高調せられたことは、恐らく未曾有であろうと云われる。この事は、国力の充実拡大の必要に対する強烈な自覚意識の発動として実によるこぶべきであると思うが、さてこの日本精神が我々にとつて、いかに換え難い立派なものであるとしても、それによつて現代の時勢に処してゆこうとするには、これを裸の儘ままで持ち出したのでは役に立たない。近頃問題になっている、イタリヤとエチオピアとの戦争の場合に就つても見るがよい。エチオピア人とても、数千年の帝国を保持しているエチオピア魂をかなり強く持っていると思われるが、それにも拘かわらず何故彼等が今日の戦争に於て非力を嘆かねばならないのであろうか。この答は甚だ簡単である。つまり彼等は近代文化の衣裳を缺かいているからではないか。

ところで近代文化の特質が科学の発達にあることは、ここに改めて言うまでもないであろう。我々は古代のギリシヤ文明や支那文明の如ごときものについても、精神的には必ずしも高度でないとは云い難いのである。併しかし近代文化が之等と全く異なるのは、それが偉大なる科学を所有する点にある。科学なしには、我々が現代を左右しようとしてもそれは断じて不可能でなければならぬ。我々は即ちこの關係に於て科学の重大な意味を十分に知悉ちしつし、そして之を我々のために利用することを心がける必要がある。

科学は何故なにゆゑにさほど偉大な効果をもち得るのであるか。我々人間文化の進歩なるものが即ち科学の進歩に外ならないと云つてよい程であるのは、果して何に依るか。我々は之これを十分に理解しておかねばならない。さもないと、

徒らに現代文化の缺陷を見て、之を直に科学の罪に帰するような極めて皮相的な見解さえも行われ得るからである。科学の本質は自然、社会、文化等に於ける諸事実間の関係を、最も忠実に探求闡明するにある。自然に関するものを自然科学と称するのであるが、之がすべての科学の基礎をなし、最も著るしく発達して居り、且つ物質的に極めて多くの恩恵を我々に与えているので、今日単に科学と云えば、多くの場合専ら自然科学を意味する有様である。あらゆる産業に対して、又交通や武器や日常生活上の諸設備や治病、衛生に対して自然科学がいかに多大な効果を挙げているかは、実に驚く許りである。

自然科学がかくも偉大であり得るのは、我々が之によつてよりよく自然を知ることができからである。人々は科学が自然を征服すると云う。自然の儘では見得られない処を科学が実現し、そこに、全く新しい物質世界を創造するかの如く見える点ではそうであるが、併し我々の科学はいつでも本質的な自然を利用してゐるのに外ならない。自然こそ我々の依頼すべき唯一の力の根源であり、之に随従することによつて隠れた自然の本質を發揮せしめることができるのである。征服するのは自然の単なる外觀だけであつて、その本質ではない。自然の力に抛らな

いでは、ただに一步をも自由に踏み出すことはできないのである。自然のなかに包蔵せられる本質的な関係、我々はそれを科学的真理と云うのであるが、これこそ実に厳然とした存在である。我々は科学的研究を進めることによつて漸次その深奥に突き入ることができると共に、この知識を体験するところの各々の人は、恐らくそこに人間以上の無限に偉大な力を仰視しないわけにはゆかないであろう。厳格な法則と、そしてそれらのあらゆる絶妙な調和と、自然に於けるこのような科学的真理に対する畏敬こそ、実に我々の宗教的感情の最も純粹なるものであると、私は考える。すべての古代的宗教は、単に我々の未知な世界の不思議を想像することによつて成立したが、そこには不思議な謎に対する荒唐無稽な解説が蔓延することのあるものも当然である。

之に反して科学的に獲得せられる宗教的感情は、既知の真理に対する最も正しい畏敬である。そこには一切の利己的な祈願を受容するような、御都合主義の神を見ることはできないであろうが、自然の真理を不動に確守する至公至平な神が存在する。真に我々の感謝に値するものが之でなくして何であろう。我々が生きる所以も、自然によってそしてまた科学によって恩恵を享け得る所以も、総てはかような神の存在に歸し得られるからである。

我々が現在に於て所有している科学はまだまだ甚だ不完全であつて、我々の望む処を十分に果し得ないのは勿論である。ところが今日迄の科学の發達が持ち来した燦然たる効果に徒らに眩惑してしまつて之をその一切であるかの如く見誤り、若くはその由来した缺陷を指摘して早計にも科学的文化を呪う人々さえもある。我々は併しどこまでも正当に科学の歸趨を見究めなくてはならない。科学的文化が我々の生活を必ずしも幸福にしないと云うことに對しては種々の理由がある。例えば、都会生活や工場労働の如きが甚だしい不健康を結果するなどは、なお之に對する衛生的設備を缺くからである。産業の發達や資本主義の支配が謂ゆる極度に世智辛い世情を生じ、我々の生活を不安ならしめているのは、科学的に合理的な經濟制度の確立を見ないからである。特に深刻な之等の現代の悩みを取り除くことは、実に容易ではないであろう。之に關しては、今日迄の自然科学が資本主義と相俟つて發達した事実を究明する必要がある。つまりその罪は科学それ自身にあるのではなくて、寧ろ資本主義に存するのである。之をいかに改革すべきかと云う問題は、それこそ現代に於て最も重要なものでなくてはならないのであるが、それは客觀的に社会科学の健全なる發展によつて解決を求むべきであるとしても、實際上では政治、經濟に亘る広汎な關係を有する点で非常な困難とせられねばならない。併しそれにしても、問題の困難な故をもつていつまでもその儘に放置すべきではないのであり、之に對する科学的な征服こそ最も望ましいとしなければならぬ。要するに、最も科学的であることが我々の理想である。勿論、私は、人間が科学的であることのために感情的に生きることを妨げるであろうとは思わない。科学の關する処は知識の問題であつて、それ以外のものではないからである。又科学

的であると云う語を物質的の意味に誤解する人もあるが、それは科学の抽象性を十分に理解しないからで、我々の物質科学は一つの抽象面に過ぎないのであり、そのみに捉とらわれるのは決して真の意味での科学的ではない。畢竟、現代に於て文化人としての資格は、その人がどこまで真に科学的であり得るかと言ふ点にあると、私は思う。併しかしそれと同時に、この事がいかに実践の上で困難であるかを見ることができよう。

今日の科学時代に於て、しかしなお科学の不備である処に乗じて、いかに多く科学的であり得ない事柄が一般的に行われているか。之等これらを一々に追究して見るならば、恐らくその夥おびただしいのに驚くであろう。更にまた通俗な世間に於ては、いかに非科学的な迷信の勢いが強いかに對して、寧ろ呆然ぼうぜんとしないわけにはゆかない程である。家相とか方位とか月日とかの吉凶や身上判断や、その他のあらゆる占い事、怪しげな祈祷やまじないや、その他の類似の行為は平然として行われ、そして之等これらに信賴する人々のいかに数多いかを思うならば、それが昭和聖代の世相であるとは信じ難い有様である。

或る人々は頻しきりに科学の万能でないことを揚言する。勿論もちろん、科学が万能でないのは確かであつても、併しかしそれが知識的に非科学的なものよりもより多くの信賴をおき得ることは、また疑いを容いれるわけにはゆかない。之これを疑うのは、結局自ら人間の理性を否定するのに等しいからである。科学は我々のために作られたものであり、之これを出来るだけ利用する事が我々の特権なのである。ただ戒いましむべきは、現在の科学的知識が一切を盡つくしていると誤信する処にあるが、それは科学の誇りに浸り過ぎる点に端を發するのであつて、それらの過矢の故に科学を顧慮しないのは、更に一層の大きな誤りを犯すものでしかあり得ない。

(昭和十一年一月)

- 底本には、『科学のために』（科学主義工業社、一九四一（昭和十六）年一月二十五日）を使用した。
- 読みやすさのために適宜振り仮名を追加した。
- 旧漢字は新漢字に、旧かな使いは新かな使いに変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館 「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。